

61 受けついでゆく記憶のその先は読めない歴史年表のうらおもて 佐佐木朋子 (昭和二八)

幸綱の妻。『パロール』(平成一八年)より。「記憶」や「歴史」は受けついでゆけるが、未来はどうなるかはわからない。テロに脅かされる不安定な世界情勢、現代の不透明さが「読めない」ものとして描かれている。「歴史」は「うら」も「おもて」もあり、決して一元的ではないものとして、「年表」が用いられている。(佐佐木定)

62 天井のエビは死にたるその後も値段付けられ評価されている 田中徹尾 (昭和二九)

歌集『人定』(平成一五年)所収。田中徹尾は労働基準監督署の監督官や署長を務めた。職業柄、労働災害や過労死で亡くなった労働者に関する問題処理に多く直面してきた。この歌は昼食時を詠んだものと思われるが、死んでも今まさに天井の具として「評価」されるエビの描写に、労働災害や過労死で命を落としても、評価されることもなく社会から忘れ去られてゆく労働者への同情と、非情な企業と無関心な社会への怒りが込められている。(青山)

63 シャンプーがいくつもならんでいるように平和がいくつもあればよいのに 大野道夫 (昭和三一)

佐佐木信綱の曾孫。昭和五八年に「心の花」入会。「心の花」全国大会や記念大会などの開催に尽力し、多くの若手会員を育成した。社会学者としても活躍し、短歌を社会学の視点で考察した『短歌の社会学』がある。掲出歌は「戦争」「平和」という二元論ではなく、日々感じる何気ない幸せを口語体で詠んだ一首。「平和」はひとつではないというゆるぎない信念が込められている。第一歌集『秋階段』(平成七年)より。(田中拓)

64 暗きアトリエにて生み出されし人体が水平線の窓辺に置かる 経塚朋子 (昭和三二)

第一歌集『カミツレを摘め』(平成二八年)所収のこの歌には、「アルベルト・ジャコメッティ展」と詞書がある。ジャコメッティの塑像が窓辺に置かれている様子を過不足のない言葉で詠う。アトリエは暗いが、水平線の向こうには眩しいひかりが広がっているに違いない。明と暗、光と影の美しさに息をのむ。美術に造詣が深い作者のすぐれた画面構成力が生み出した一首。平成二九年度日本歌人クラブ東京ブロック優良歌集賞を受賞。(原)